



高校生の頃

～その1～

土橋 重治

全日制高校への進学を諦めて、働いて夜、定時制高校で学ぶことを決めてから七年間の夜学生時代のことを書くこうとしていた時、「実践人」No.739号が発行されて手元に届いた。同誌は「人間いかに生きるべきか。『全一学』を基盤とした『立腰人間学』の実践」をテーマとした森信三先生が創刊した同人誌である。

同誌に神渡良平氏による『人生二度なし』森信三の世界―思想と生涯―の中に、森信三先生がその生涯で挫折感をおぼえたことのひとつとして、次のような記述がある。

「従兄弟の結婚式の帰り、叔父の曰比野格と人力車に乗って帰る時『信三、お前は将来どうするんだ』と聞かれ、『中学へ進むつもりです』と答えた。叔父は『森の両親には中学に進学させ

る資力はないぞ、学費が要らない師範学校に行き、先生になれ』といわれた。

またそんなある日に、養父の言い付けで担任の榊原先生宅に届け物をする時、先生の離れで、中学校へ進む四、五名の同級生たちが受験勉強の補習を受けていた。みんな裕福な家の子で、自分の置かれている立場を見せつけられた思いをした。『よく来たなあ、まあ上がれ』と勧める先生の誘いを振り切つて、先生の家を飛び出した。家への田んぼ道を辿りながら、悔しさから涙が出てしようがなかった」とある。

森信三先生は、このあと本意ではなかったけれども、一年間母校の小学校で給仕をしたあと師範学校へ進学することになる。

これを読んで、私が定時制高校へ進学を決意した時の心境と重なって、心が熱くなった。

そして今日(平成三十一年一月二十六日)、その森信三先生の「全一学、立腰人間学」の世界を学習する、浅井周英先生が主宰する和歌山読書会があった。

この会の発足当時から三十年間、月一回の例会に出席させていただいている。今回のテーマは、森信三先生が昭和十二年三月から同十四年三月まで、天王寺師範学校で講義した筆記録で、今も重版を続けるベストセラー「修身教授録」の十四講「真実の生活」を学習した。

「人間の価値は、その人がこの二度とない人生の意義を、いかに自覚するか、その自覚の深さに比例する」と先生は説く。

ひとつの喩えとして「様々な鉱石の層よりなる大きな絶壁がある。上へいくほどよい金属の鉱石があるとする。人は絶壁に梯子を